

2011年春学期末レポート

第4期生川上恵

[GSR300] General Studies Capstone

全学部の一般教養であり、最後の必須科目であった。このクラスの目的は、リーダーシップを磨くためと、黒人文化の継承を研究するためであった。黒人文化は、南部にあるサウスカロライナ州とジョージア州に住むガラ人 (Gullah) によって形成されたものである。ガラ人は、アメリカ国内で、最もアフリカの言語と文化の遺産が保存されていることが知られている。彼らの言語は、英語を基本として、ジャマイカや西アフリカの言語からの影響によって出来上がっている。現実では、若者達は、都会に出ることが多く村離れになっている状態のためにガラ語や文化の継承の減少が目立っている。そのためにクラスではその文化や言語を保存するために、博物館に行ったりするなどリサーチをした上で、各グループでプレゼンテーションをすることになった。私のグループでは、DVD を作ることになり、一人ずつガラ人の歴史や文化など事前に撮影して編集した。ミーティングの時に他のメンバーとなかなか時間が合わず大変だったのだが最終的には無事に仕上げることでよかった。個人主義の強い米国人と、協調性を好む日本人のチームワークとの違いについて考えさせられることが多かった。

(Senior seminar)[卒業論文]

専攻しているろう者学部の必須科目であり、卒業論文は、大学院専攻に合わせて日米の手話通訳の比較についてリサーチすることになった。クラスの初めに **proposal, annotated bibliography, literature review, data collection**, 分析するというように論文の基本的なステップを習うことになった。日本の短大を卒業した以来数年ぶりの論文なので、改めて基本をしっかりと身につけるのにこのクラスはちょうど良かった。リサーチをするだけでなく、インタビューをすることになったために日本から資料を取り寄せたりするなど大変だったのだが、リサーチを通して、日米の違いについて明らかになった。論文は、15分の動画を作ることになり、手話の表現のチェックなど予想以上に時間がかかったのだが、リサーチだけでなく、同時に技

術を学ぶことができてよかった。アメリカ手話での論文は、英語で書かれた論文より難しいことは意外であった。手話表現の細かいミスで、最初から撮り直しが必要になるなど苦労が多かったのだが、表現力を磨くためにはよい経験になった。

(Introduction of Society) 「社会学入門」

このクラスは、ろう者学部の必須科目の一つである。社会学入門であることから基本的な知識を学んだ。クラスを通して感じたことがいくつかあった。人種のるつぼである米国は、日本と違って人種、文化や地位などの問題が多く、クラスの中でもそれに関するテーマについて議論することが多かった。また、地位が人種によって限定されたり、ステレオタイプの影響で、人種差別されたりすることがいまだに残っている。他に経済の面で、中国にいる労働者を低賃金で雇用し、米国内で電化商品などを安く売れるようにして経済発展する一方、アメリカ人の失業者が高いことからなかなか仕事が見つからないという矛盾が起きているという内容のビデオを見る機会があった。日本にいるとなかなか人種などの問題に直面する機会がないことから、地位が人種によって限定されたり、ステレオタイプによって差別を受けたりという米国の現実を学んだクラスだった。

(History of the American deaf Community) (アメリカのろう社会の歴史)

このクラスは、2010年の夏休みの間に履修した「アメリカの歴史」に続き、必須科目に合わせて、ろう社会の歴史を受講することになった。米国内の初のろう学校設立から、ミラノ会議に続きギャロデット大学、そしてろう社会の現状。アメリカ歴史を通して、ろう社会の変化が明らかにわかる。手話が主流だったがミラノ会議後、ろう社会が大きく変わり、口話教育に中心となりそれからトータルコミュニケーションにメインストリームにろうプログラム。次々としてろう社会にインパクトを与えてきたが、手話という言語は変わりなく続いていることがわかる。リサーチで日本のろう者社会について調べる機会があった。図書館のデータベースで調べてみると、当時の東京ろう大学（現：筑波附属大学）の様子が書かれた記事をいくつか見つけた。現代のようにインターネットがない時代でどのように情報交換をすることができたのか不思議に思ったのだが、現代のようにインターネットがない時代では、情報が文書によって得られていたことを知った。日本に限らず、ろう社会の現

状を社会に情報提供することは有益であり、諸国の情報を自国の歴史と照らし合わせてろう社会の変化を学ぶことも大切であると感じた。

(Introduction to Education and Teaching) (教育学入門)

この科目は、自由選択として教育学入門を選択することになった。この科目はろう教育を中心したものではなく、一般教育を集中したものである。教育学を受講するのはこのクラスで初めてになるが、テキストを読んでもみると、多文化をメインとした内容である。黒人、ラテン系移民の家族の場合、文化が違うことから家族のつながりが強くどのようにアプローチをすればよいのか、また教師としての任務と責任について議論した。ふと思ったのだが、米国は黒人とラテン系を中心としているが、アジア系に関する情報が少なく感じられる。

クラスの最後に、各生徒が5分間、自分の得意分野を教えることになった。私の場合、以前の経験から日本手話を教えることになった。教えるということは、生徒が学ぶことを楽しむことができるということを目指しているので、基本的な手話を教えた後にクイズを出すなどして楽しめるよう工夫した。生徒達は、日本手話を学びながら楽しんでいた姿を見て、教えるという達成感を改めて実感した。

[ASL 304 : Fingerspelling and ASL Numbers : Theory and Practice]

(アメリカ手話の指文字と数詞)

このクラスは、Deaf Studies の自由選択科目であった。アメリカ手話の指文字と数詞を分析するクラスである。指文字と数詞の歴史は、確実な情報が少ないこともあって、さらにリサーチが必要だった。クラスの最初に指文字は、アメリカ手話の一部になるかどうかの議論があった。生徒の何人かが、一部ではないと言ったので、私にとっては意外であった。なぜなら指文字は手話の一部だと当然のように思っていたからだ。数詞の場合、例えば「1」の表現を出す時に、手の甲、もしくは表を出すのかどうかの議論があった。実際、ユーチューブで、指文字を使っている動画を検索してみると、ろう者と一部の聴者の使う指文字が違うことに気づいたので、意外なところに小さなミスがあるので驚いた。これまで手話を研究してきたのだが、指文字と数詞のように分析することの面白さを知ったクラスである。

[ASL 305 Non-manual Grammatical Signals in ASL]

(アメリカ手話の非手指の文法的記号)

このクラスは、表情を中心に研究したものである。指文字／数詞と同じ先生でこのクラスは顔の表現、肩の上下、頭の動き、ロールシフト、口形、鼻／頬の動きによって手話の表現（意味）が変わることを学んだ。顔の表現だけで、いろいろな視点によって意味の捉え方が違う。指文字／数詞のクラスと同じように「ELAN」というプログラムを利用して研究した。「ELAN」とは、元々音声言語を研究としたプログラムだが、視覚言語のように、手話を分析することができる。そのプログラムが出来る前は、一つ一つ単語を紙に記入する方法だったが、そのプログラムができてから、単語や専門用語を記入するだけで分析でき、時間をセーブすることができるのだ。そのように大学内で手話言語学を学んでいる人たちは、そのプログラムを利用して研究していることが多い。

クラスを通して、アメリカ手話のしくみを学ぶと同時に、日本手話だとどういう意味になるだろうかと思いつかべていた。ロールシフトでも目の瞬きだけで、役割が変わるといふ細かい部分まで発見でき、またそれだけでなく話の切り替えも瞬きによって変わるというように普段見えていない部分まで気づかされた。手話だけでなく、表現の研究の必要性があるので、近い将来、日本でも「ELAN」のプログラムを利用し、さらに効率的な分析ができるのではないだろうか。